

未来を植える——森が教えてくれること

明治神宮国際神道文化研究所
主任研究員
今泉宜子
Yoshiko Imazumi



平成 御社殿群の大修復

いよいよ東京五輪・パラリンピックの開催まであと一年に迫った。その二〇二〇年は、筆者が奉職する明治神宮にとっても鎮座百年という重要な年回りにあたる。目下、境内は明年に向けた御社殿群修復工事の真っ最中だ。昨年五月には、本殿の屋根葺替えにあたり、御祭神を本殿から仮殿にお遷しする遷座祭（せんざさい）を催行した。本年八月、修復を終えた本殿に御霊代（みたましろ）をお迎えする本殿遷座祭を行うまで、参拝は仮殿でお願いしているが、実はこの仮殿には、明治神宮が戦後、御用林として育てた檜材が用い

られている。

社殿造改修用材の生産を目的に、明治神宮が境外で森を育てていることを知る人は少ないかもしれない。この備林は昭和三十年代から四十年代にかけて設置され、現在では全国に五カ所約一、〇〇〇鈔に広がっている。その森が教えてくれることを、以下に覚書にしてみたい。

大正 一〇〇年計画の森づくり

毎年約一、〇〇〇万人の参拝者が訪れる明治神宮。明治天皇と昭憲皇太后を祀る神社として創建されたのは、大正九（一九二〇）年のことだ。今では「代々木の杜」と親しまれる緑豊かな

なこの森は、全国から寄せられた一〇万本の献木による手づくりの森だ。造営に奉仕したのは、全国各地の青年団の若者達。その数は延べ一万人に達する。

植林には、東京帝国大学農科大学教授の本多静六を中心とする当代の林学者達が関わった。彼らの理想は、当時「代々木の原」と称されて木々もまばらな不毛の地に、自然の循環で繁茂する大森林をつくり上げることだった。そのためには暖帯に属するこの土地に最適な樹種を選定する必要がある。また周辺の工場からの煤煙による大気汚染をいち早く問題視し、都市環境に強い樹種にも注意を払った。

このような考えから、本多達は神社林は杉・檜であるという当時の常識を覆し、明治神宮の森にふさわしい主林木は檜・椎等の常緑広葉樹だという結論に至る。彼らが植栽計画の詳細を記した『明治神宮御境内林苑計画』には、一〇〇年を超える時間軸で天然林相を実現することをめざした、四段階の遷移経過が予測されている。つまり彼ら林学者は、自分が生きているうちに森の完成形を見ようとは望まなかった。一〇〇年後、一五〇年後の我々に未来の希望を託したのだ。

昭和 明治神宮備林の創設

昭和二十（一九四五）年四月十四日未明。山手を中心とした激しい空襲により、明治神宮では本殿を始め主要な建物のほとんどが灰燼に帰した。現在の社殿は昭和三十三（一九五八）年に再建したものだ。それから六〇年を経て、老朽化が目立つ銅板屋根の葺替え等、設備の更新を図っているのが、冒頭に紹介した平成の修復工事である。

戦後の社殿復興事業では、檜を主にして一部杉を用いている。これらは林野庁の特別の厚意により、国有林の巨材の払下げを受けて実現し

たものだが、その用材の総量は一万二千石（約二、一六〇立方メートル）の多きに達するものだった。折しも東京では、アジア初のオリンピック開催が決まり、新幹線や地下鉄、競技会場等の建設が始まっていた。その一環として昭和三十五（一九六〇）年、明治神宮境内の一部が首都高速道路建設敷地に設定される。実は神宮備林とは、このオリンピック関連事業のために譲渡した土地の補償金で買入れた山林が原点となっている。その「備林設定の目的」に曰く、

市）、②秩父備林（埼玉県秩父市浦山）、③清内路備林（長野県下伊那郡阿智村清内路）、④那智備林（和歌山県東牟婁郡那智勝浦町）、⑤芝川備林富士施業地（静岡県富士市）。

このうち②は浦山ダム、④は熊野那智大社の別宮、飛瀧神社の御神体である大滝の水源林に相当する。社殿の御用林としては勿論、国土の水源涵養林として、備林は確かに御礼の森へと生長を遂げつつある。

そして、新しい時代へ

今般の仮殿造営では那智勝浦から伐り出した檜が柱等に使用された。備林の材が社殿に用いられたのはこの修復工事が初めてという。昭和の植栽から六〇年。苗木が用材に育つまでそれだけの時間が必要だということだ。思えば昭和の先輩もまた、五〇年後、一〇〇年後の未来に投じて、理想の実現を夢見たのではなかったか。そして時代はあらたまり、新元号で迎える来年度の鎮座百年。代々木の原を森に変え、お詫びをお礼へと昇華した先輩方には及ぶべくもないが、筆者もまた、一〇〇年後の未来を信じて今日の本の木を植える一人でありたいと願っている。

転換には目を見張るものがある。

この計画は一千町歩の森づくりを期して進められ、現在までにほぼその目標を達成。以下の五カ所が該当する。①芝川備林（静岡県富士宮